

LEVEL

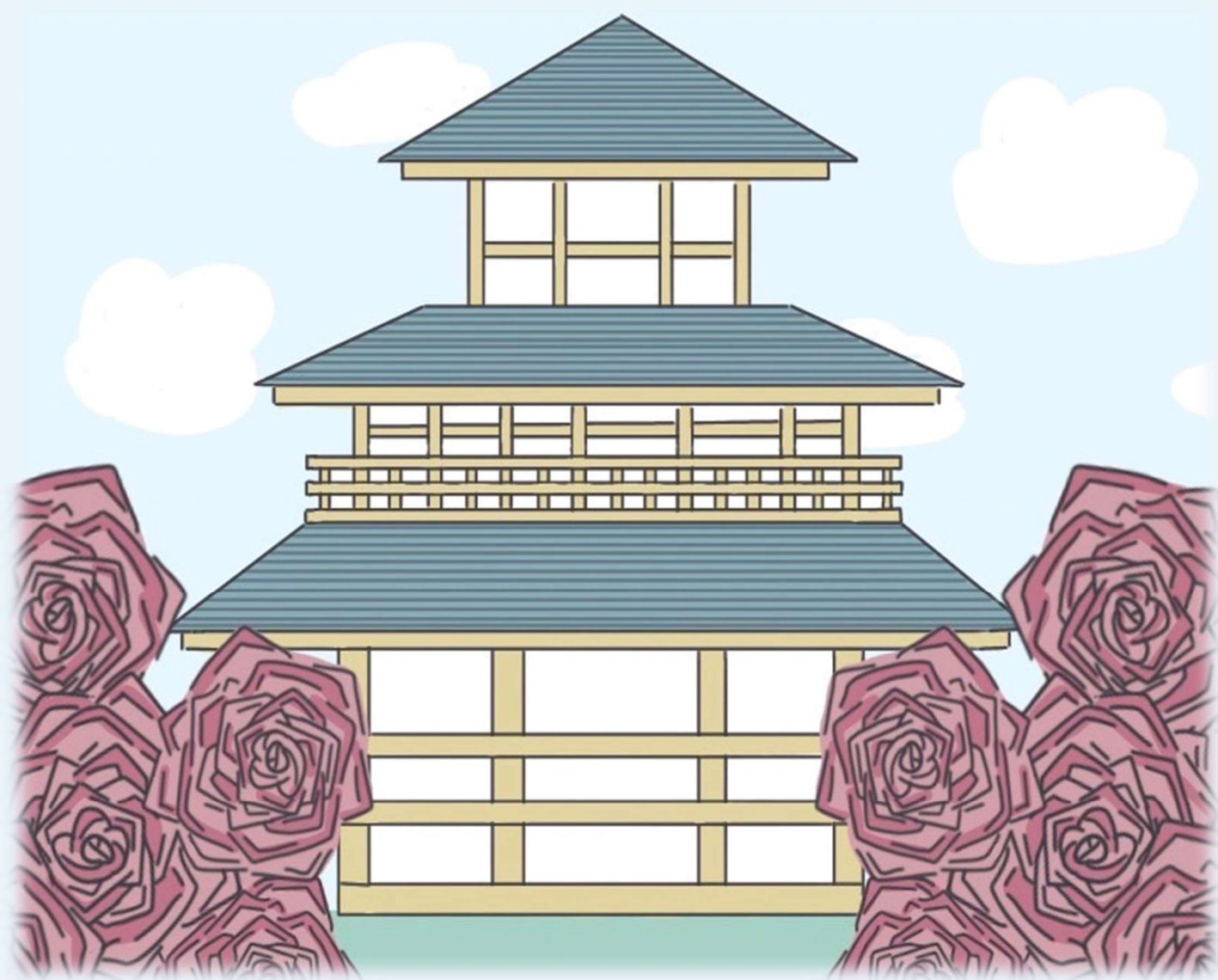
5

原作 芥川龍之介



神々の微笑

神々かみがみの微笑びしょう



ある春の夕、Padre Organino はただ一人、長い宗教服の裾を引きながら

南蛮寺の庭を歩いていた。



イタリアのイエズス会士 (1530~1609)
日本の寺の見た目だが、キリスト教のための教会 (十六世紀~十七世紀初期)

庭には、松や檜といった日本の植物の間に、バラだの、
橄欖だの、

月桂だの、西洋の植物が植えてあった。特に咲き始めたバラは、夕明りが幻

の木々をぼんやりと照らす中に、薄甘い

匂いを漂わせていた。それはこの庭の静けさに、

何か日本とは思われない不可思議な魅力を添えているようだった。



オルガンテイノは寂しさびそうに、赤いあか、砂すなの小道こみちを歩きながら、ぼんやりと昔むかし

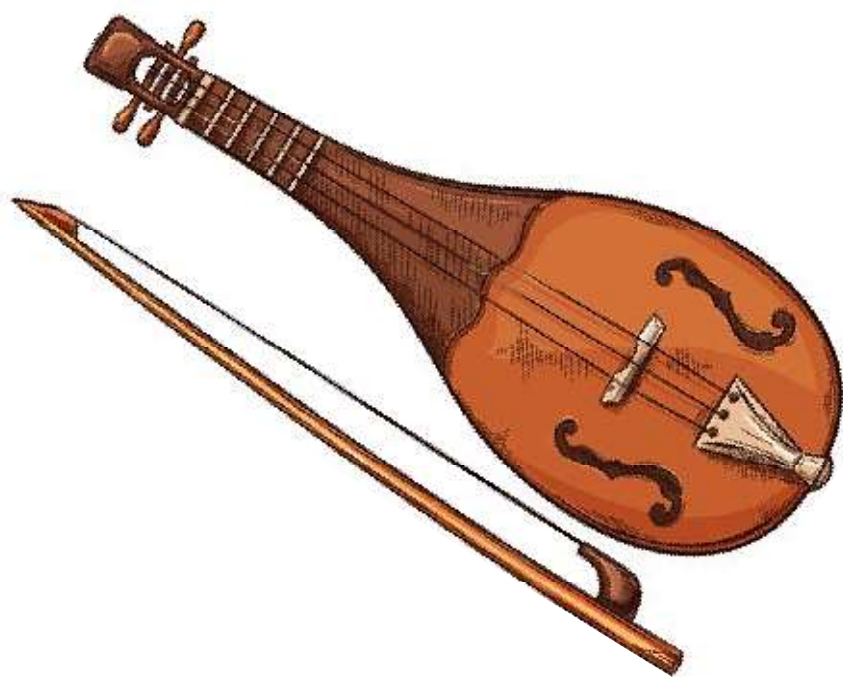
を思い出おもしてだいた。ローマの大本山だいほんざん、リスポア

(今いまのポルトガルの首都リスボン)の港みなと、ラベ

イカの音おと、すももの味あじ——そういう思おもい出では、

この西洋せいようの僧侶そうりよの胸むねを締めしつけるような故郷ふるさとへ

の懐なつかしさ (Saudade) を運はこんできた。



彼はそつとデウス（神）の名を唱えたが、この悲しみは消えないばかりか前より一層、彼の胸へ重苦しい空気を広げだした。

「この国の風景は美しい――。」

オルガンテイノは、思い返した。

「この国の風景は美しい。気候もまず暖かく穏やかである。ここに住むのは、たとえば愉快ではないにしても、不快にはならないはずではないか？ が、自分は

どうかすると、リスポアへ帰りたいたいと思うことがある。これは懐かしさだけでも
ろうか？ いや、日本を去る事が出来れば、どんな土地へでも行きたい。中国
でも、タイでも、インドでも——ただこの国から一日も早く逃れたい気がする。

——しかしこの国の風景は美しい。気候もまず暖かく穏やかである。……」

オルガンティノは、息を吐いた[3]。

この時偶然、彼は、点々と木かげの苔に落ちた、ほの白い桜の花を見つけた。

ため息をつくこと。

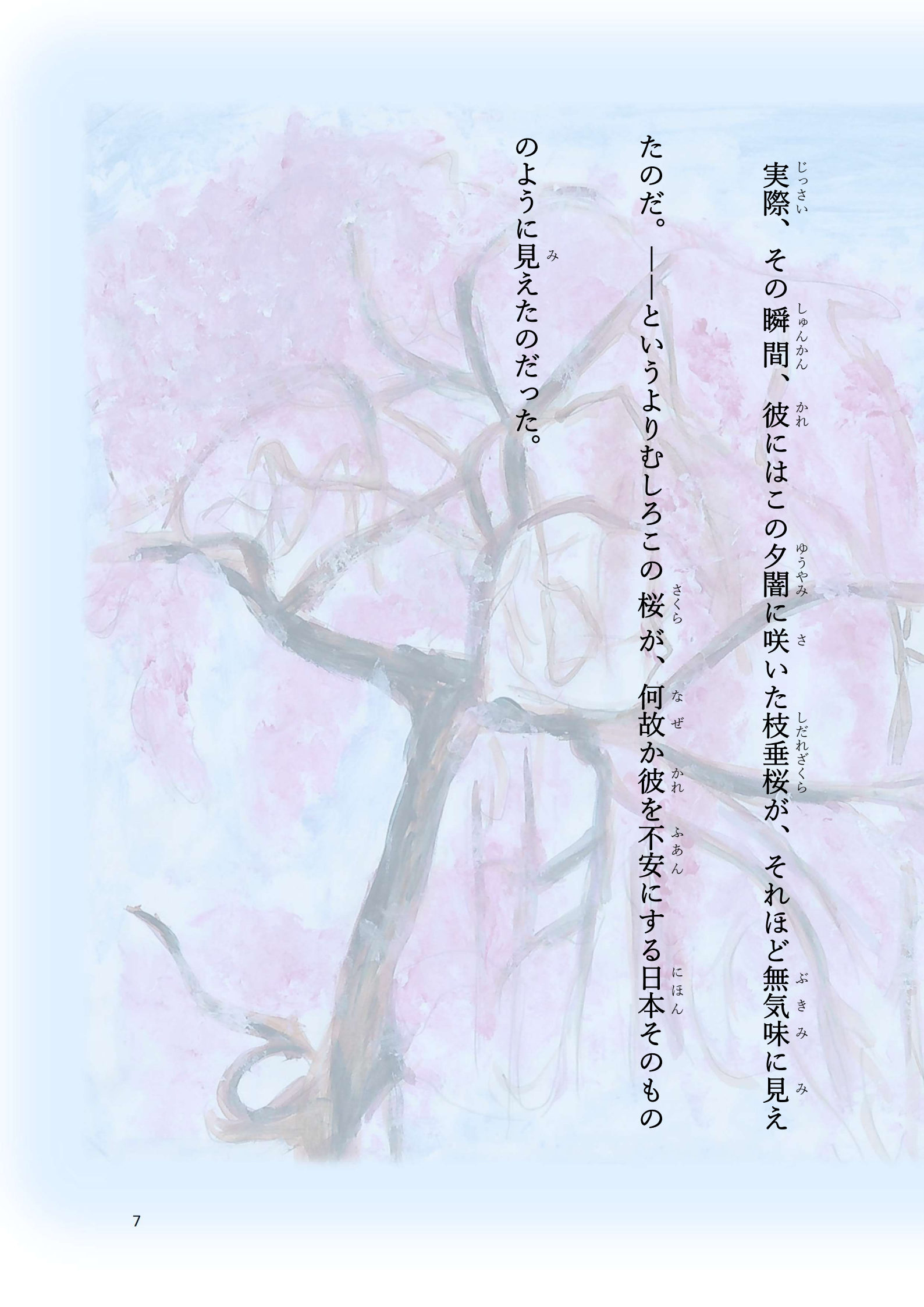
桜さくら！

オルガンテイノは、おどろ驚いたように薄暗い木立の間を見つめた。そこには四、し

五本の棕櫚の中に、枝を垂らした糸桜が一本、はかな儂げに花を咲かせていた。

「御主、守らせ給え！」

オルガンテイノは一瞬、じゅうじ十字を切ろうとした。



じっさい
実際、その瞬間、しゅんかん 彼にはこの夕闇に咲いた枝垂桜が、かれ ゆうやみ さ しだれざくら それほど無気味に見え

たのだ。——というよりむしろこの桜が、さくら 何故か彼を不安にする日本そのもの

のように見えたのだった。み

が、彼は一瞬の後、それがただの桜だったことを知ると、恥ずかしそうに

苦笑しながら、静かにまた、もと来た小道へ力なく帰って行った。

*

*

*

三十分後、オルガンテイノは南蛮寺でデウスへ祈りを捧げていた。そこには、

ただ円天井から吊るされたランプがあるだけで、その光の中で部屋を囲むフレ

スコの壁には、聖ミカエルが地獄の悪魔と、死んだモーゼの体を争っていた。

が、^{いさ}勇ましい^{だいてんし}大天使はもちろん、^{いか}怒り^{くる}狂つ

た^{あくま}悪魔さえも、^{こんや}今夜は^{おぼろ}朧げな^{ひかり}光の^{かげん}加減か

^{みよう}妙に^{ゆうび}いつもよりは^み優美に見えた。

それはまた、^{さいだん}もしかすると、^{まえ}祭壇の^{さそ}前に^{さそ}捧

げられた、^{みずみず}水々しい^{えにしだ}バラや^{にお}金雀花が^{にお}匂っ

るせいかもしれなかった。



彼は、その祭壇の後ろにじっと頭を垂れたまま、熱心にこう祈った。

「ああ、デウスよ！リスポアを船出した時から、

私の命はあなたに捧げております。ですから、

どんな困難に遇っても、怯えずに進んで参りま

した。しかし日本に住んでいるうちに、

私の使命がどのくらい難しいかを知り始めました。



この国には山にも森にも、あるいは家々の並んだ町にも、いたるところに何か
不思議な力が潜んでおります。そうしてそれが知らないうちに、使命を邪魔し

ております。ではその力とは何か、私にはわかりません。まず、この力を破

らなければ。おお、デウスよ！どうか私オルガンテイノに、勇気と忍耐とを

お授け下さい。――」

その時ふとオルガンテイノは、鶏の鳴き声を聞いたように思った。



が、それには注意ちゅういもせず、さらにこう祈りの言葉いのことばを続つづけた。

「使命しめいを果はたすためには、この国くにの山やまや川かわに潜ひそむ力ちからと戦たたかわなければなりません。

どうか、古いにしえの予言者よげんしゃのように、私わたくしも………」

祈りいのの言葉ことばはいつのまにか、彼かれの唇くちびるから消きえてしまった。今度こんどは突然とつぜん、けた

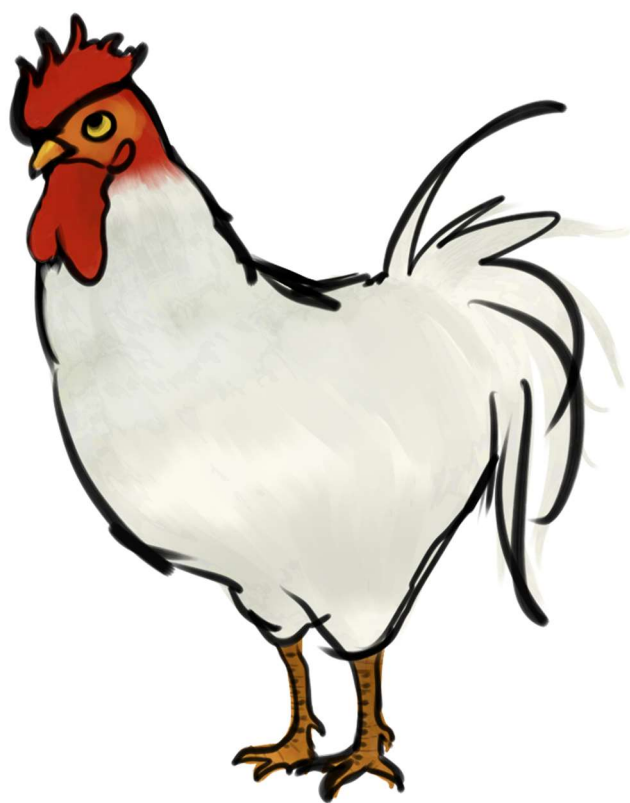
たましい鶏にわとりの鳴き声なごえが聞きこえたのだ。

オルガンテイノは、怪あやしみながら周しゅうい囲ながを眺ながめまわした。

すると、彼の真後ろには、白々と尾を垂れた鶏が一羽、もう一度夜でも明け

たように騒ぎたてているではないか。オルガンティノは、飛び上がるや否や、

アビト両腕を広げながら、あわててこの鳥を追い出そうとした。



が、ふたあし みあし ふ二足三足踏み出しただと思うと「おんあるじ御主」とき切れ切れにき叫び、さけぼうつとそこへた立ちすくんでしまった。

うすぐら薄暗い部屋の中へや なかには、いつどこ

からき来たか、むすう無数のにわとり鶏がじゅうまん充満

している——それがそら空をと飛んだり、



あるいはそこを駈^かけまわった

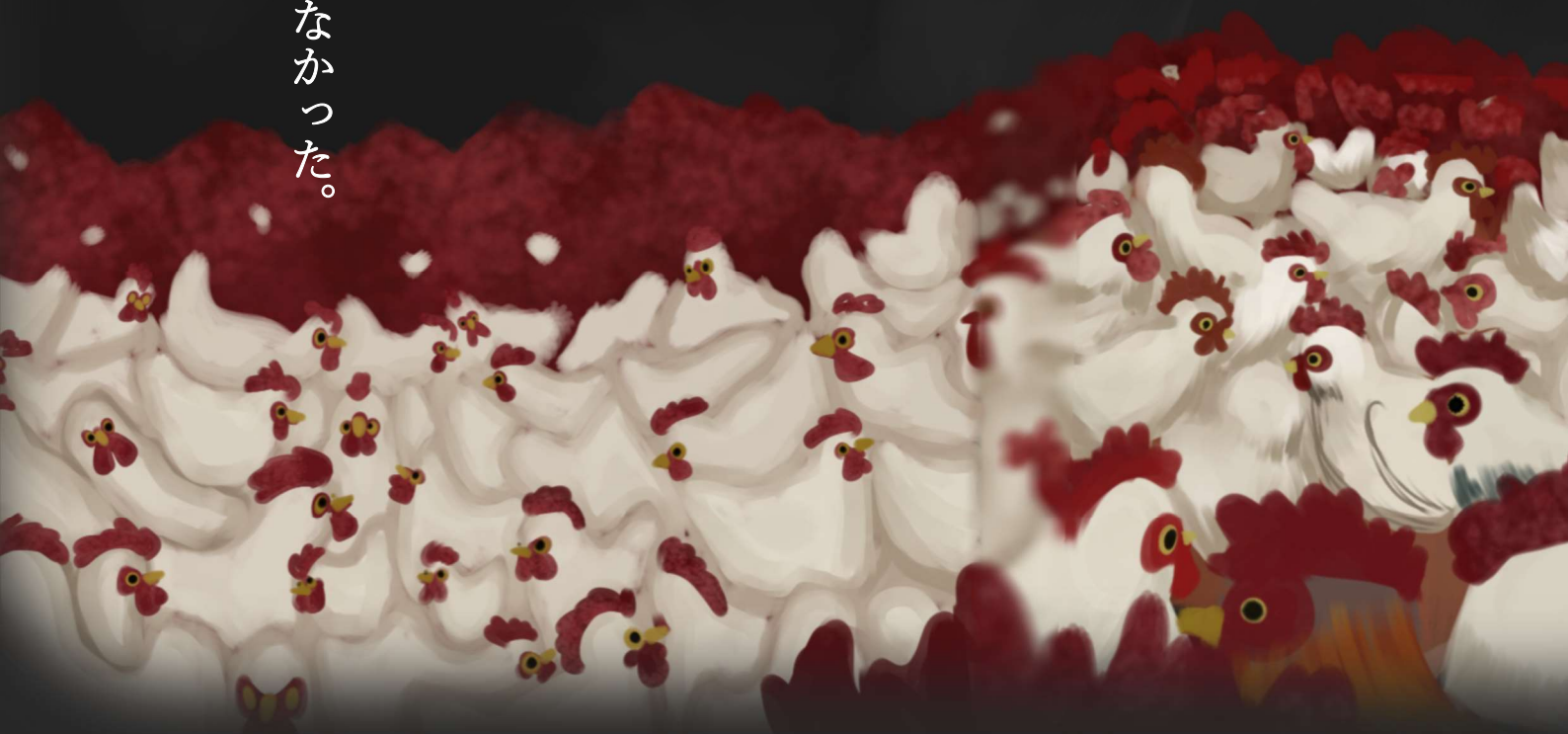
り、オルガンテイノに見^みえる限^{かぎ}り

を鷄冠^{とさか}の海^{うみ}にしているのだった。

「御主^{おんあるじ}、守^{まも}らせ給^{たま}え！」

彼^{かれ}はまた十字^{じゅうじ}を切^きろうとした。

が、彼^{かれ}の手^ては不思議^{ふしぎ}にも、少^{すこ}しも自由^{じゆう}に動^{うご}かなかった。



部屋には、だんだん赤い光が、どこからとも知れず差しはじめた。オルガン

ティノは、苦しそうに呻き、ぼんやりとあたりへ浮かんできた人影を見た。

人影は、見る間に鮮やかになった。玉の首飾りをつけた男女の一群は、愉快そ

うに笑い楽しんでいた。群がった無数の鶏は、より高らかにコケコッコと騒

ぎたてた。同時に、聖ミカエルを描いた壁は、霧のように夜へ吞まれてしまった。

その跡には、——日本の酒盛りの幻が、呆気にとられたオルガンテイノの前

へ漂ってきた。オルガンテイノは、赤い光の影に、

古代の服装をした日本人たちが、

酒を酌み交わしながら、

輪になって座っているのを見た。



そのまん中には女が一人、——日本では見た事のない、堂々とした体格の女

が一人、大きな桶を伏せた上に踊

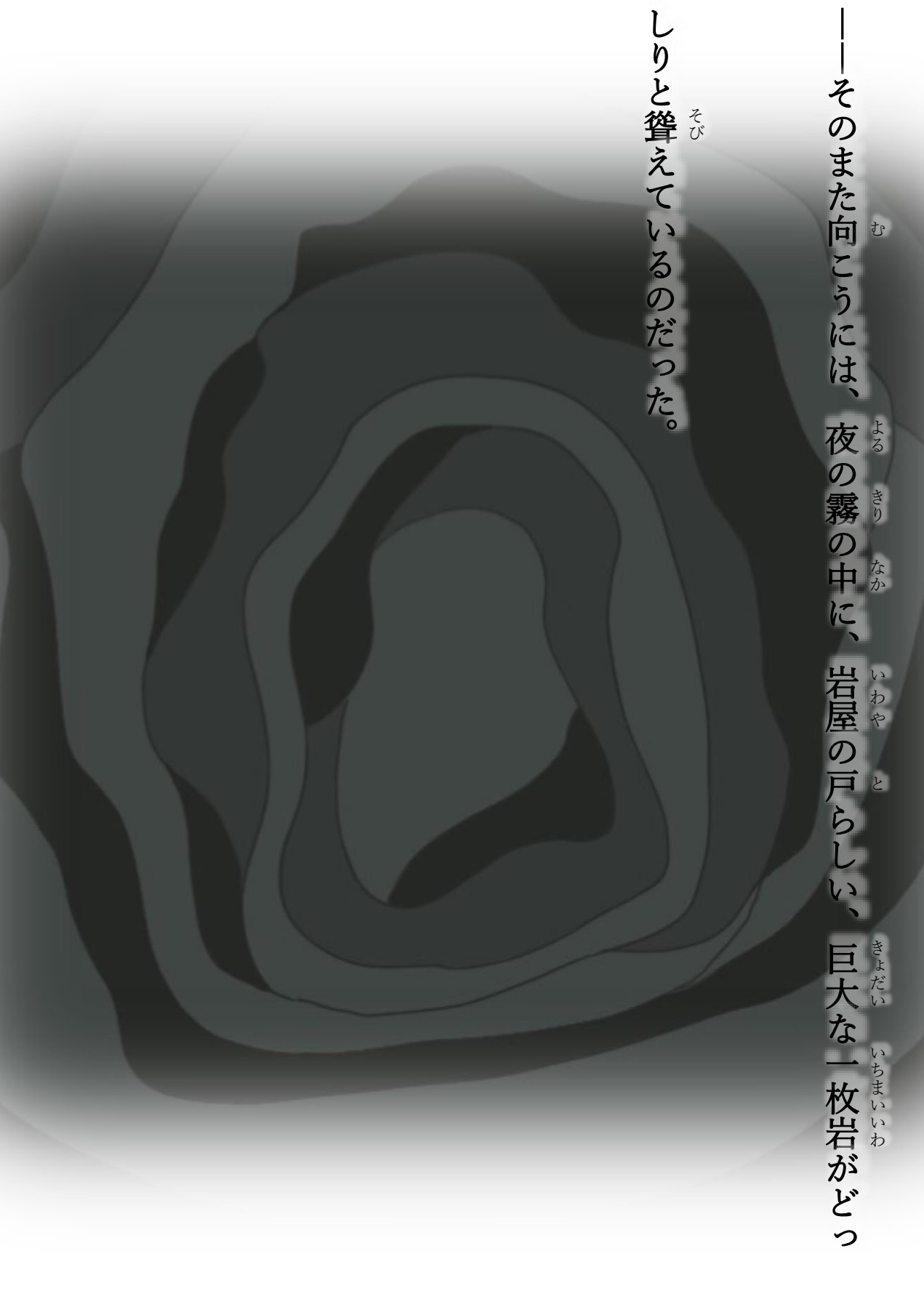
り狂っているのを見た。彼らの周

りには、数百の鶏が、尾羽根

や鶏冠をすり合せながら絶えず嬉

しそうに鳴いているのを見た。





——そのまた向^むこうには、
夜の霧^{よる}の中^なに、
岩屋^{いわや}の戸^とらしい、
巨大^{きよだい}な一枚^{いちまい}岩^{いわ}がどつ
しりと聳^{そび}えているのだった。

桶おけの上うえにのおんった女なは、いつまでも踊おどりをやめななかった。

彼女かのじよの髪かみを巻まいたつるは、ひらひらと空そらに翻ひるがえった。

彼女かのじよの首飾くびかざりは、パチパチと何なん度も霰あられのようひびに響あき合あった。

彼女かのじよの手てにとつた小笹こざさの枝えだは、

縦たてや横よこに風かぜを打うちまわった。

しかもその露あわにむねした胸むね！



赤い篝火の光の中に艶々と浮かび出た胸は、ほとんど、オルガンテイノには

妖艶としか思われなかった。彼はデウスを念じながら、顔をそむけようと集中

した。

が、やはり彼の体は、どういふ神秘的な呪いの力か、身動きさえ出来なかった。

突然、静けさが幻の男女たちの上へ降った。桶の上に乗った女も、正気に

返ったように、やっと狂わしい踊りをやめた。

いや、鳴き競っていた鶏さえ、この瞬間は首を伸ばしたまま、一度にひっ

そりとなってしまうた。すると、その重く静まり返った中に、永久に美しい女

の声がどこからか響いてきた。

「私がここに隠っていれば、世界は暗闇になったはずではないか？ それを

神々は、賑やかに笑っていると見える。」

その声こえが夜空よぞらに消えた時とき、桶おけの上うえにのった女おんなは、ちらりと一同いちどうを見渡みわたしながら、意外いがいなほどしとやかに返事へんじをした。

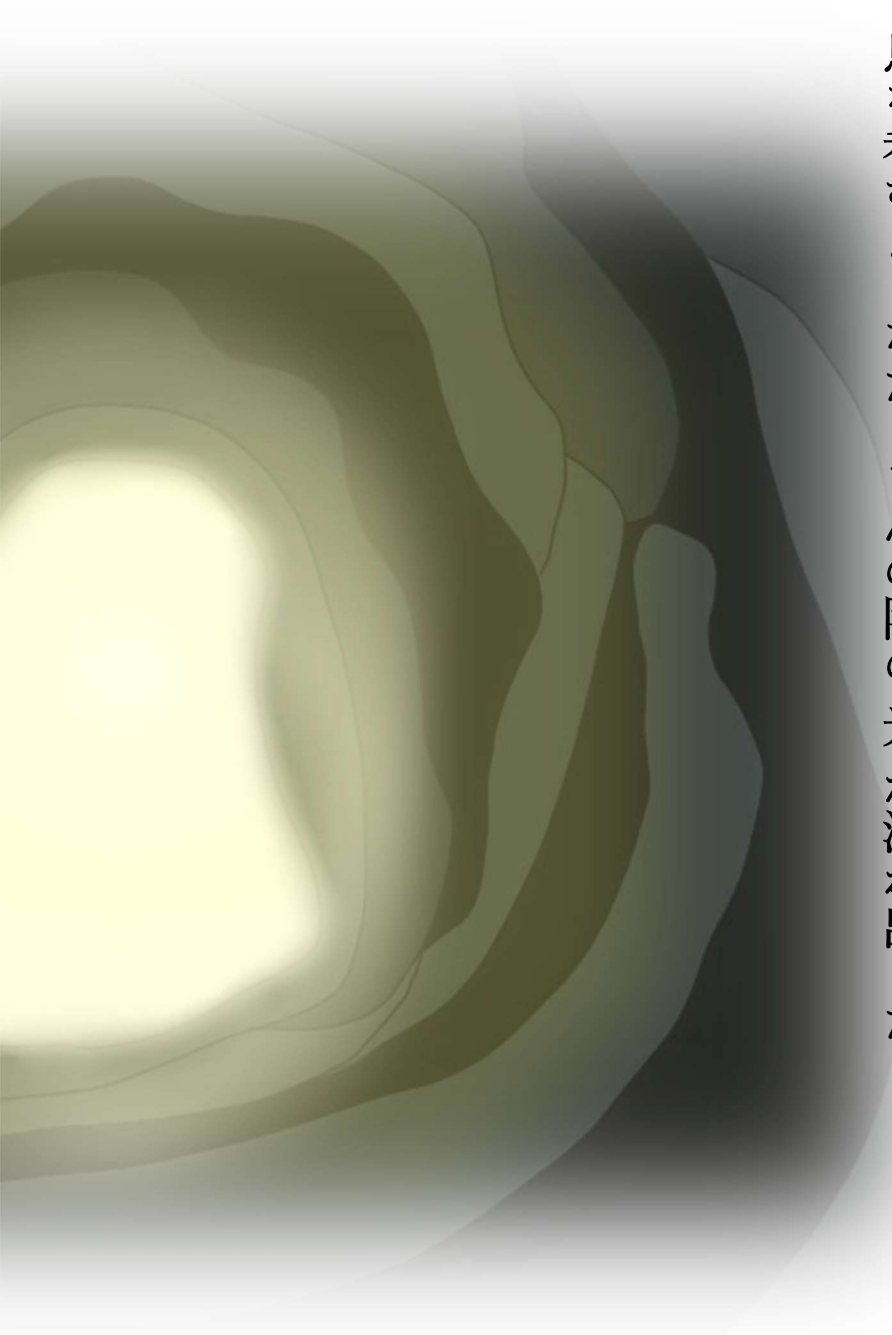
「それはあなたよりも素晴すばらしい、新あたしい神かみがおられますから、喜よろこび合あっておるののでございます。」

その新あたしい神かみというのは、デウスを指さしているのかもしれない。——オルガ
ンティノは少すこしの間あいだ、この怪あやしい幻まぼろしの变化へんかに、やや興きよう味みのある目めを注そそいだ。

沈黙は、しばらく続いた。が、鶏の群れが一斉に鳴いたと思うと、向こうに

夜の霧をせき止めていた岩屋の巨大な一枚岩がゆっくりと左右へ開き、その割れ

目からは、息を呑むようなたくさんの陽の光が溢れ出した。





オルガンテイノは叫さけぼうとした。が、舌したは動うごかなかった。

オルガンテイノは逃にげようとした。が、足あしも動うごかなかった。

彼かれはただ、眩まよしさのために、烈はげしくめまいが起おこるのを感じかんじた。

そうして、ひかり なか おおぜい だんじよ かんき こえ てん のぼ き光の中に、大勢の男女の歓喜する声が天に昇るのを聞いた。

「おおひるめむち大日靈貴！ おおひるめむち大日靈貴！ おおひるめむち大日靈貴！」

「あたら しみ新しい神などおりません。 あたら しみ新しい神などおりません。」

「あなたに さかあなたは逆らうものは、ほろ亡びます。」

「おおひるめむち大日靈貴！ おおひるめむち大日靈貴！ おおひるめむち大日靈貴！」

そういう声の湧き上がる中に、冷汗をかいたオルガンテイノは、苦しそうに叫

んだきりそこへ倒れてしまった。……



夜も深まった頃、オルガンテイノはやつと意識をとり戻した。彼の耳には、

神々の声が、未だに鳴り響いているようだった。が、あたりを見まわすと、神々

はもういなかった。円天井のランプの光が、さっきの通り、ぼんやりと壁画を

照らしているばかりだった。あの幻にどんな意味があるのか、彼には分からな

かった。しかしあれを見せたものが、デウスでないことだけは確かだった。

オルガンテイノは歩きながら、思わずそっとひとりごとをもらした。

「この国の霊と戦うのは思ったよりもっと困難らしい——」

するとその時、彼の耳にこういう囁きを送るものがあつた。

「負けですよ！」

が、そこにはあいかわらず、ほの暗いバラや金雀花のほかに、

人影らしいものも見えなかつた。



オルガンテイノは、翌日の夕も、南蛮寺の庭を歩いていた。しかし彼の青い

目には、どこか嬉しそうな色があつた。それは今日一日のうちに、日本の侍が

三、四人、キリスト教徒の列に入ったからだつた。

庭の橄欖や月桂は、ひっそりと夕闇に聳えていた。

ただその沈黙を乱すのは、鳩が巢へ帰るらしい羽音

だけで、古代の日暮れのように平和だつた。



「やはり、十字架の前には、穢らわしい」日本にほんの霊れいの力ちからも、勝利しょうりする事ことは難むずか

しいと見える。しかし昨日きのう見た幻まぼろしは？——いや、あれは、幻まぼろしに過ぎすない。や

がてこの国くにも色いろんな所ところに、キリスト教きょうのお寺てらが、建たてられるであろう。」

オルガンテイノは、そう思いながら、赤あかい、砂すなの小道こみちを歩あるいていった。すると

誰だれかが、後ろうしからそつと肩かたをたたいた。彼かれはすぐに振ふり返かえった。

きたなくて不快ふかいで、自分じぶんまでよごれてしまいそうな感じかん。憎にくらしさも含ふくむ。

しかしそこには夕明りが、道を挟んだすずかけの若葉に、うっすらと漂って
いるだけだった。

「御主よ、守らせ給え！」

彼はこう呟いてから、ゆっくりと前へ向き直った。

と、彼の側にはいつのまにか、昨夜の幻に見えた通り、首に玉を巻いた老人

が一人、ぼんやり姿を煙らせたまま、ゆっくりと歩いてきていた。

「誰だ、お前は？」

驚いたオルガンテイノは、思わずそこへ立ち止まった。

「私は、——誰でもかまいません。この国の霊の一人です。」

老人は、微笑を浮かべながら、親切そうに返事をした。



「まあ、一緒に歩きましょう。私は、あなたとしばらくの間、お話しするた
めに出て来たのです。」

オルガンテイノは十字を切ったが、老人はそれに少しも恐怖を示さなかった。

「私は、悪魔ではないのです。ご覧なさい。この玉やこの剣を。地獄の炎に
焼かれた物なら、こんなに美しく澄みきってはいないはず。さあ、もう

呪文など唱えるのは、おやめなさい。」

オルガンテイノは、不愉快ふゆかいそうに腕組みうでぐみをしたまま、老人ろうじんと一緒にいっしょ歩き出あるした。

「あなたは、キリスト教きりすとをひろめに来てきいますね、——」

老人ろうじんは静しずかに話はなし出だした。

「それも、悪い事わるではないかもしれません。しかし、デウスもこの国くにへ来きては、

きつと最後さいごには負まけてしまいますよ。」

「デウスは、全能ぜんのうの御主おんあるじだから、デウスに、——」

オルガンテイノはこう言いかけてからふと思いついたように、いつもこの国の信徒に対する、丁寧な口調を使い出した。

「デウスに勝つものは、ないはずです。」

「ところが、実際はあるのです。まあ、お聞きなさい。はるばるここへ渡って来たのは、デウスばかりではありません。」

孔子、孟子、莊子——その他にも、

中国から何人もが、絹だの宝石だの、

色々な物を持って来ました。いや、そ

れよりも尊い、漢字という不思議な

文字さえ、持って来たのです。

が、中国は我々を支配出来たでしょうか？



たとえば、文字をご覧なさい。中国の文字は、我々を支配する代わりに、我々

のために支配されました。私を知る柿本人麻呂という日本の詩人は、中国

の牽牛織女の話をもとに、七夕の歌を作りました。その歌は、今も日本に残っ

ていますが、それを日本の文化に沿って書き

換えたため、中国の牽牛織女は七夕の歌

に存在しません。



あそこに歌うたわれた恋人こいびと同士は、あくまでも

日本の彦星ひこぼしと織姫おりひめです。彼らかれの枕まくらに響ひびいた

のは、ちようどこの国くにの穏おだやかな川かわのように、

清きよい、天あまの川がわの流ながれる音おとでした。中国ちゆうごくの激はげ

しい河かわに似にた、銀河ぎんがの音おとではなかつたのです。



しかし、私は、歌より文字のことを話さなければなりません。

人麻呂は、あの歌を記すために中国の文字を使いました。が、それは意味よ

り、発音のための文字だったのです。舟という文字が入った後も、「ふね」は

常に「ふね」だったのです。これは我々、この国の神の力です。中国人の文字

はいつのまにか、日本人の文字になり出したのです。そのうち、この国に住む

我々の力は、うっすらと感じられるはずですか？

オルガンテイノは、ぽかんと老人の顔を眺め返した。彼には、せつかくの相手

の話も、半分はわからないままだった。

「中国の人たちの後に来たのは、インドの人たちです。——」

老人は、言葉を続けながら、道ばたのバラの花をむしると、嬉しそうにその匂

いを嗅いだ。が、バラをむしった跡にも、ちゃんとその花は残っていた。ただ、

老人の手にある花は、色や形は同じに見えても、どこか霧のように煙っていた。

「ブツダ うんめい どうよう仏陀の運命も同様です。が、こんなことをいちいちお話しするのは、はな退屈を増たいくつ ま

すだけかもしれません。ただ、き気をつけて頂きたいのは、いただ本地垂跡ほんじすいじやく』という教おし

えの事ことです。あの教おしえは日本人にほんじんに、大日靈貴おおひるめむちは大日如来だいにちによらいと同じものだと思わおも

せました。もし日本人にほんじんに、大日靈貴おおひるめむちは知らないにしても、大日如来だいにちによらいは知しっている

- 5 にほん かみさま かいがい わた日本の神様と海外から渡ってきた仏教ぶつぎょうを合わせた日本独特の信仰しんこう
- 9 ぶつぎょう しんこう仏教で信仰される仏ほとけ

ものが おおぜい
者が大勢あるとしてみなさい。それでも彼らの大日如来の姿の中には、インド

ほとけ おもかげ
の仏の面影よりも大日靈貴が感じられるでしょう。彼らが喜んで信仰した仏

えんこう こくじん
は円光のある黒人ではありません。つまり私が申し上げたいのは、デウスのよ

くにこの国に来て、勝つものはないという事なのです。」

「まあ、お待ちなさい。」

あなたはそういわれるが、——」



オルガンテイノは、口を挟んだ。

「今日などは侍が二、三人、一度にキリスト教に入りましたよ。」

「それは何人でも入るでしょう。ただ信じたというだけならば、日本人はほとんど

ど、仏陀の教えを信じています。しかし、我々の力というのは、破壊する力で

はありません。造り変える力なのです。」



老人は、バラの花を投げた。花は手を離れたと思うと、たちまち夕明りに消えてしまった。

「なるほど造り変える力ですか？　しかし、それは日本人に限った事ではないでしょう。どこの国でも——たとえば、ギリシャの神々といわれた、あの国に

る悪魔でも——」

「大いなるパン」は、死にました。いや、いつかは、よみがえるかもしれせん。

しかし、我々はこの通り、未だに生きています。

「たとえば、この造り変える力が我々だけに限らないでも、やはり、油断はなり

ませんよ。いや、むしろ、気をつけなさいと言いたいのです。我々は、古い神で

すからね。あのギリシヤの神々のように、世界の夜明けを見た神ですからね。」

「しかし、デウスは勝つはずです。」

オルガンテイノは強気に、もう一度同じことを言い放った。が、老人は、それ

が聞こえないようにゆっくり話し続けた。

「私はつい四、五日前、日本の西の海辺に上陸した、ギリシャの船乗り

に会いました。私は彼の色々な話を聞いて来ました。今では、百合若と名乗って

るそうで、この国くにの人ひとに変わかりました。ですからあなたもお気きをつけなさい。デ


ウスも、必ずかなら勝かつとはいえませぬ。」

老人ろうじんは、だんだん小声こごえになった。

「もしかすると、デウス自身じしんも、この国くにの人ひとに変わかるでしょう。我々われわれは木々きぎの中なか

にもいます。浅い水あさみずの流れながにもいます。バラの花はなを渡わたる風かぜにもいます。寺てらの壁かべに

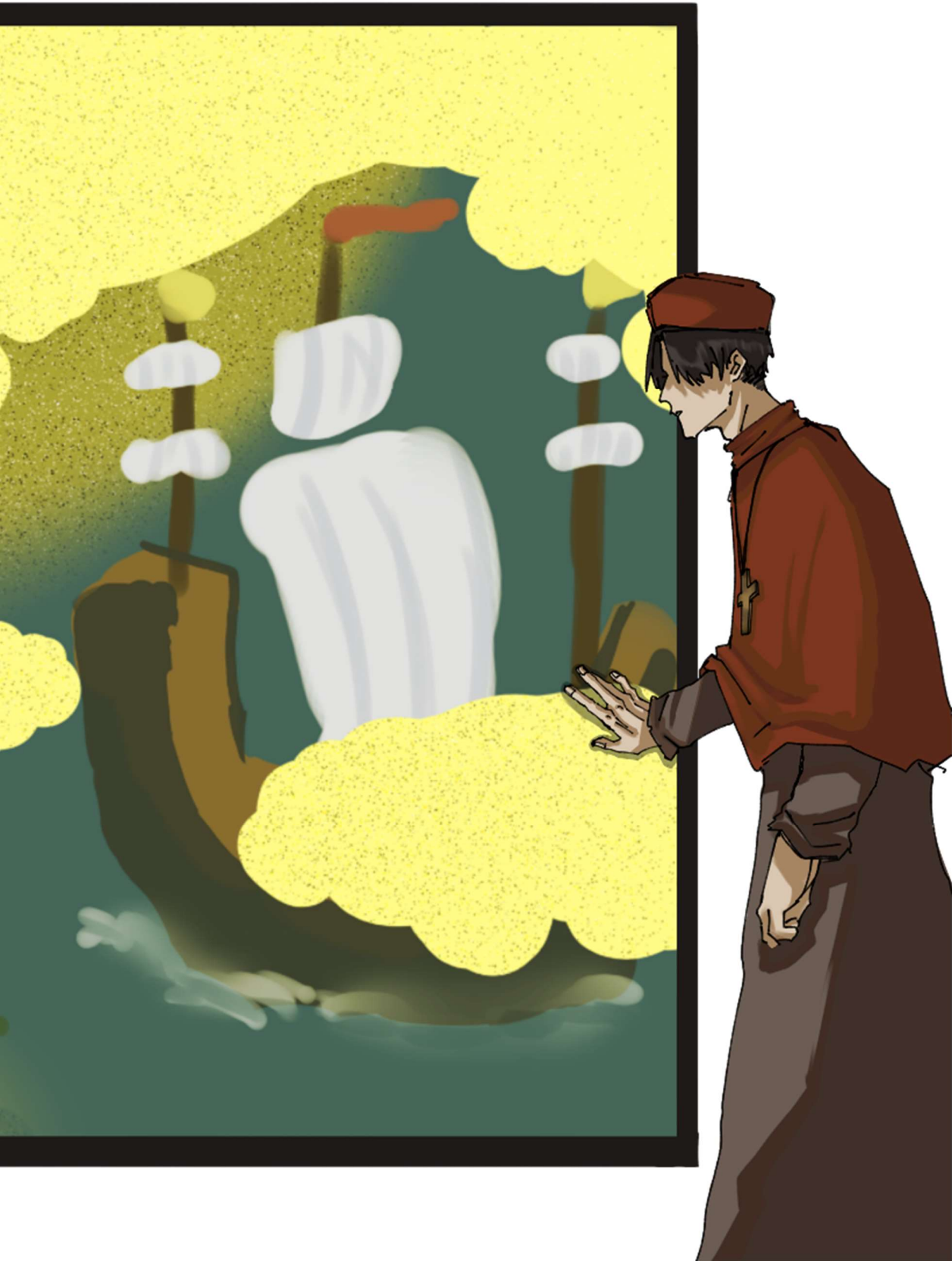
残のこる夕明ゆうあかりにもいます。どこにでも、いつでもいます。お気きをつけなさい………」

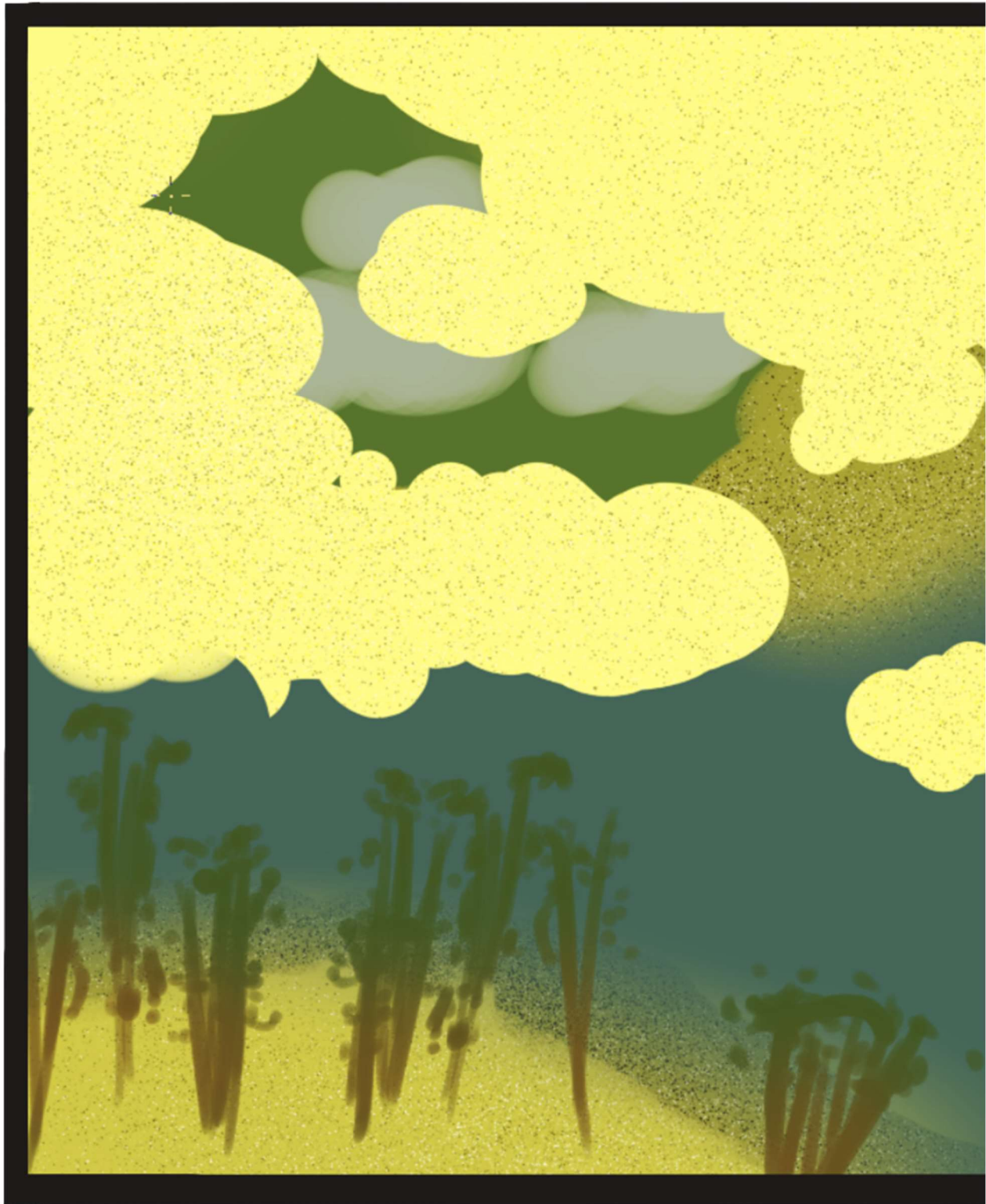


その声こゑが、とうとう絶たえたと思おもうと、老人ろうじんの姿すがたも夕闇ゆうやみの中なかへ、影かげが消きえるよ

うきに消きえてしまった。と同時どうじに寺てらの塔とうからは、眉まゆをひそめたオルガンオルガンテイノ上うえ

へ、アヴェ・マリアの鐘かねが響ひびき始はじめた。





南蛮寺なんばんじのパアドレ・オルガンテイノは、——いや、オルガンテイノに限かぎったこ

とではない。ゆつたりと宗教服アビトの裾すそを引ひいた、鼻はなの高たかい西洋人せいようじんは、夕暮れゆうぐの光ひかり

の漂ただよった、幻まぼろしの月桂げっけいやバラなかの中から、一いっそう双びようぶの屏風かえへと帰いって行いった。

南蛮船なんばんせんの入港にゆうこうするところをえが描えがいた、十七世紀じゅうななせいの古ふるい屏風びようぶへ。

さようなら。パアドレ・オルガンテイノ！

君は今、君の仲間と、日本の海辺を歩きながら、金の雲に旗をあげた、大きい

南蛮船を眺めている。デウスが勝つか大日靈貴が勝つか——それはまだ現在でも、

簡単には決められないかもしれない。が、やがては、我々日本人の精神によって、

決められるべき問題である。君は、その過去の海辺から、静かに我々を見ていた

まえ。

君きみは同おなじ屏風びょうぶの、犬いぬを引ひいたカピタン「∞」や、日傘ひがさをさした黒くろん坊ぼうの子供こどもと

一いっしょ緒しょに、忘わすれ去さられるかもしれない。それでも、新あらたに、水すい平へいへ現あられた、我われ々われ

の貿易船ぼうえきせんの大砲たいほうの音おとは、キリスト教きりすとをひろめるといふ、古ふるめかしい君きみらの夢ゆめを、

破やぶるときがあるに違ちがいない。

それまでは、——さようなら。パアドレ・オルガンテイノ！

∞
ヨーロッパ人じんによって日本にほんに置おかれた交易所こうえきじよのキャプテン

タイトル	にほんご ^{たどく} 多読の本 レベル5 『 ^{かみがみ} 神々の ^{びしょう} 微笑』 原作 ^{げんさく} 芥川 ^{あくたがわりゆうのすけ} 龍之介 原作元データ ^{あおぞらぶんこ} 青空文庫 https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/68_15177.html
ぶん 文・イラスト	^{らんじゆく} 蘭塾 くおん・ぽっぴん・どりいーむ https://www.ashitamirai.org/
はっこう 発行	^{らんじゆく} 蘭塾 https://www.ashitamirai.org/
せいさくび 制作日	2024 ^{ねん} 年 ^{がつ} 6月 ^{にち} 23日

©オランダ日本語教師会 2024
無断転載・引用は禁止します。

^{さくひん}作品の^{じだいはいけい}時代背景や^{げんさく}原作の^{ふんいき}雰囲気、^{さくしゃ}作者の^い言い^{まわ}回しを^{こうりょ}考慮し、^{いちぶ}一部、^{さべつてき}差別的
^{とら}と捉えられかねない^{ひょうげん}表現や、^{げんだい}現代ではあまり^{つか}使われない^{ひょうげん}表現が含まれており
 ますことをご^{りょうしょう}了承ください。

